

報告書

JSEKM「第12回全国大会報告」
主催：日本電子キーボード音楽学会 第12回全国大会組織委員
とき：2016年11月13日（日） 10時30分～17時45分
ところ：昭和音楽大学南校舎

プログラム

10:30 あいさつ

築瀬進（昭和音楽大学学長）

出田敬三（日本電子キーボード音楽学会代表幹事・平成音楽大学学長）

10:45 基調講演

日本音楽舞踊会議コンサートシリーズから見えてくる電子オルガンの将来像

・ピアニストから見た電子オルガンの魅力 北川暁子（音舞会理事長）

・EL オーケストラによるコンチェルトとアリアのタペ」シリーズと共生の可能性

戸引小夜子（音舞会副理事長）

・「COMPOSITIONS」シリーズとオリジナル作品の可能性 西山淑子（音舞会理事）

11:30 総会

1. 開会の辞 2. 議長選出 3. 報告 4. 協議 5. 閉会の辞

12:00 昼食

13:00 パネルディスカッション&ラウンドテーブル

①電子オルガンの教育楽器としての可能性—電子オルガンの裾野を広げる活動—

パネリスト：西山 淑子、小林 ひとみ、高橋 豊 司会：柴田 薫 書記：金銅 英二

②電子キーボードと ICT を活用する音楽教育

パネリスト：上出 美希、小梨隆弘、田中 功一 司会：小倉 隆一郎、脇山 純 書記：石川 裕司

③タテ線譜メソッドとは何か - II—シニア世代から小学生まで広がったメソッド実践報告—

企画・コメンテーター：阿方 俊 アドバイザー：和智 正忠 司会：内田 智子 書記：坂 利美

14:40 休憩

14:45 研究発表

①森松 慶子：生演奏の意味合いを踏まえたスピーカーの配置 演奏会場での音空間のデザイン

②マーク・マンノ：MacGAMUT 6ソフトウェアによる基礎楽理及び聴力学習の強化

③秋谷 万里子：大宮和幸楽器シニア対象キーボード講座—タテ線譜の改良と身体にやさしい奏法の早期導入—

④金銅 英二：高度経済成長期1970年前後の電子オルガン事情—ハモンドオルガンX-66 を中心に—

⑤石川 裕司、小林 恭子：ミュージカル創作におけるMLの活用

⑥垣浪 文美香：小学校におけるタテ線譜を用いた鍵盤ハーモニカの学習について

⑦前澤 陽：ベルリンフィルと人工知能合奏技術による共演の試み

⑧稲原 文江、大庭 美奈子、島田 美智子、藤井 京子：鍵盤指導者による音楽療育活動

17:00 JSEKM 情報交換 2016

18:00 懇親会

以下、レポートです。

挨拶



築瀬 進（昭和音楽大学学長）

第12回日本電子キーボード音楽学会全国大会の開催に心からお祝いと歓迎の言葉を申し上げる。第1回大会は2005年11月5日日本学北校舎で開催され、この新しい南校舎では今回3度目の全国大会となる。

昭和音楽大学は創立者・下八川共祐現理事長が日本の音楽界ではいち早く「総合的なオペラ教育」を理念に掲げて以来、オペラ、バレエ、ミュージカル等総合芸術を中心として発展してきた。昭和15年スタートの音楽学校から短大、4年制大学という伸展の軸は「音楽は総合芸術であるべきだ」という理念である。また本学は、時代の流れに伴い音楽を巡る環境も変わる中で、常に先進的なイノベーションの結果も取り入れながら音楽を発展させようと志向しており、本学会の皆様の先進的なお取り組み、新しい音楽の可能性を広げてきた素晴らしいご活動には心からの敬意を表する。

音楽は時代とともにある、という教育理念を掲げ、現在本学は電子キーボードに関して様々な取り組みをしている。管楽器合奏に電子オルガンが弦楽器のパートとして参加してのハイブリッド・オーケストラは、昭和音楽大学が授業を通して取り組んできたもので、演奏会でも素晴らしい成果を挙げている。このスタイルは現在中国でも本格的な西洋音楽の振興に貢献している。また、先日は本学のゆりホールでピアノコンチェルトの発表会が行われた。主役はピアノとともに、オーケストラパートを務めた電子オルガンであった。1～2台の電子オルガンがオーケストラパートを担当し、少人数のアンサンブルで見事なコラボレーションが展開されて私も楽しませていただいた。さらに電子ピアノを使ったミュージックラボラトリー(M.L.)のグループレッスンでは、基礎的な訓練を行っている。12台の電子ピアノを備えたM.L.部屋が4つあり、キーボード訓練、鍵盤ハーモニーの練習に活用されている。

世の中は日夜進化を遂げており、昨今の学生諸君は音源といえばYouTubeを参照するのが当たり前になっている。新しい音楽状況が目の前でまさに今、展開している。変化にはプラスのものもマイナスと感ぜられるものもあるが、最後は人間である。人間が目の前にある機器を様々な活用法、モーツァルト、バッハ、ベートーヴェンといった先人が担ってきた音楽をさらに発展させていく責務がある。新しい時代状況に的確に対応できるのは先進的な楽器であり、それが電子オルガンを始めとする電子キーボードである。その意味合いにおいて、本日の学会が充実したものであるよう祈念し、私の歓迎の言葉とさせていただきます。



出田敬三（日本電子キーボード音楽学会代表幹事）

日本電子キーボード音楽学会、12回目の全国大会開催にあたって会場を提供して下さった昭和音楽大学の下谷川理事長、築瀬学長、教職員在学生の皆様に心から感謝申し上げます。

大会始める前に一つご報告させていただきたい。学会の設立から尽力いただいた高萩保治先生は、病氣療養中でいらしたが、10月2日にご逝去された。戦後フルブライト奨学金を得てアメリカに留学、戦後の日本音楽教育界振興に寄与された。世界に先駆け議員立法による公益法人音楽文化創造設立、初代理事を務め、その後ユネスコ傘下の国際音楽教育協会ISMEの会長も務められた。偉大な先生を亡くし、当学会としてもご冥福を祈り、黙祷を捧げたい。長年高萩先生が示してこられた音楽への力強い情熱を忘れず、そのご遺志を注いでさらに精進を重ねたい。

また本年4月16日、熊本の大地震で平成音楽大学が大きな被害を受けて以来、本学会やご関係の皆様から温かい励ましのお言葉と多大なご支援をいただいている。本年は学園創立45周年、大学開学15周年で、12月には記念の「華麗なる音楽の祭典コンサート」も開催させていただく。復旧復興にはまだ相当時間がかかるが、現在国内外から様々な形での支援や応援のコンサート等、プロ・アマチュア問わず幅広くご支援いただき、改めて音楽の力、ネットワークに感動している次第である。心から御礼申し上げます。

本大会の基調講演では、わが国を代表するピアニスト北川明子先生と戸引小夜子先生、本学会員電子オルガン奏者西山淑子先生がお話くださる。お三方が所属する日本音楽舞踏会議では、4半世紀にわたって電子オルガンの新作初演、電子オルガンがオーケストラパートを務めてのピアノコンチェルトのコンサートを開いてこられた。これまでの演奏実践を通して、電子オルガンの将来性を語っていただく。

昨年に引き続き今年も海外からご参加下さっているアメリカ人で台湾東海大学教授のマーク・マンノ先生もご紹介させていただきたい。M.L.システムを使った、アメリカの教材によるソルフェージュ教育を中国語で30年行った、という希有な事例をご発表いただける。

本日は以前基調講演されたミュージックトレード社社長の澤野優さん、東大名誉教授嵯峨山茂樹先生もみえてい。多くの方の活発な交流が、今後の日本の音楽教育や音楽界に寄与すべく、熱意ある姿勢で臨んでいただけるよう期待している。今後の皆様のご活動がますます活性化することを祈念して挨拶の言葉とする。

日本音楽舞踊会議コンサートシリーズから見えてくる電子オルガンの将来像

ピアニストから見た電子オルガンの魅力

北川 暁子（音舞会理事長）

「EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ」シリーズと共生の可能性

戸引小夜子（音舞会副理事長）

「COMPOSITIONS」シリーズとオリジナル作品の可能性

西山 淑子（音舞会理事）

司会：阿方 俊 書記：森松慶子（文責）

阿方：日本音楽舞踊会議（以下、音舞会）はその半世紀以上の活動の中で、1990年より4半世紀にわたり、「COMPOSITIONS」というタイトルで電子オルガンの新作演奏会を催してこられた。この演奏会のごあいさつをお聞きして、電子オルガン界の内側の人間がこの楽器について感じているのとは全く違った可能性に着目されているのを感じ、ぜひこの場でもお話しいただきたいということで、会としてのご講演を依頼した

北川：昨年音舞会50周年記念演奏会を東京文化会館小ホールで開くことができた。50年前、戦後間もない時期、安保で世の中は騒然としていた。音楽家個々人は無力かもしれないが、集まれば何かできるのではないかということで作られたのが日本音楽舞踊会議である。現在舞踊関係は「休憩中」で音楽の活動が主体になっている。元来音舞会は作曲家が作った作品を実演する場を、という意欲に燃えて作られた向きが強く、当時ピアノ科の学生だった自分は、渡された作品を試演する、というところから入った。長年作曲家の故助川敏弥氏と、ピアノの深沢亮子氏のお二人を会の顔として、私はその下で理事長を務めさせていただいてきた。

ここ20年ほどで電子楽器のための作品を作る会員も増え、そういう方々が電子オルガンを使った作品発表会を、という試みが定着し、本年も行われる。私自身は電子オルガンを演奏したことはなく、初期の頃にはピアノの代用品の様なイメージがあり、接点のないうちに進化を遂げていた楽器である。知人のピアノ教師の話を知ると、自宅では電子ピアノで練習している子はタッチやペダルの使い方などで苦労する。電子楽器をピアノの代わりにするという発想には無理があり、ピアノにはピアノ、電子楽器には電子楽器の奏法なり表現世界なりがあると考えざるべきではないか。

ピアノはペダルやタッチのみを使って表現する楽器なので、そこに非常に繊細に神経を払う。自在なタッチを得るためのトレーニングにも力を注ぐ。その一方で、音色という要素に対して電子楽器を扱う人よりも鈍感になりやすいのではないかと感じる。ピアノを弾くこと自体の負担が大きいか、音の表情にまで至らず、指が速く動いたからマル、強い音が出せたからマル、という感覚が多く若い人にはあるのではないか。電子楽器奏者はもっと音色のことを考えていると思う。本来ピアノを弾く人もそうあるべきだが、なかなかそこに至らない。電子楽器を学ぶ人はそこまで至る可能性が大きいのではないかと羨ましく思っている。

ピアノの生徒がコンチェルトを演奏する際は、私がピアノでオーケストラパートを演奏することも多い。私自身がオーケストラと共演した経験で耳に入っている管楽器や弦楽器の音色感をピアノでもなるべく表現して、生徒が実際にオーケストラと共演する際、困らないようにしているつもりではあるが、電子楽器ならもっと楽に実現できるだろうな、と思ったりもする。

電子楽器は自分にとっては便利でありがたい存在だが、それにとどまらない世界を皆さんが広げていってくださることを期待している。

阿方：電子オルガンの人はレジストレーションにこだわるが、ピアノももちろん音色の表現を考えて演奏されている。電子楽器でも、用意された音色をセットしたらそれでその音色が出る、ということにとどまらない演奏表現を深めるべきであろう。

ここで、音舞会が4半世紀続けてきたコンサートの軌跡をDVDでご紹介する。和楽器も使われているのでご注目いただきたい。

DVD：箏コンチェルト（電子オルガン2台）

ソプラノアリア（電子オルガン3台）

ピアノコンチェルト（電子オルガン3台）

以上3曲全て指揮者付き

DVDの中で、ピアノコンチェルトのソリストを務めておられた戸引先生に、音舞会の電子オルガンを使ったコンチェルトとアリアのコンサートについてご紹介いただく。



戸引：ここ数年、ヤマハのエレクトーンシティ渋谷の協力を得て、エレクトーンオーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べを開催している。私はプロデューサー兼ピアノ奏者で最初から何度か出演してきた。

コンチェルトを弾くということはピアニストの夢であり、そのチャンスがあれば一度はやりたいという多くのピアニストが思っている。このシリーズには2度3度出演したいとおっしゃる方も多くいらっしゃいます。

エレクトーンの音色は機種によっても違いがあり、奏者個々の技術の差もある。また、オーケストラと一口に

言っても作曲家や年代による特色もあるのでエレクトーンで表現するのは容易ではないだろうが、年々楽器が進化し、先日の合わせ練習でもエレクトーンの弦の音色が良くなっていると感じた。木管、金管系にもさらなる進化を期待している。演奏会場であるエレクトーンシティ渋谷はデッドな環境なので、今年はピアノの音もマイクで拾って響きを出せるように工夫してみたい。このように毎年改良していけば、演奏者の理想の音楽に近づけるのではないかと。今年の本番も数日後に迫っているが、是非いらしていただきたい。

エレクトーンオーケストラとソリストの演奏が成功する一番の要は、指揮者の寺島康朗氏の存在だ。指揮者はエレクトーン奏者と数回の練習をし、ソリストが加わったところで、ソリストが勉強してきたことやテクニックを見抜いた上でエレクトーンのオーケストラパートをソリストにうまく合わせる技量をお持ちである。また、尺八コンチェルトなど、和楽器のための作品の演奏でも楽譜を読み込み、深く理解して指揮して下さる。音楽面のみならず、人間的にも奏者と良好にコミュニケーションが取れなければ演奏はうまくいかないが、寺島氏はこの点も非常に努力してくださっている。コンチェルトもアリアも安心してお任せし、満足のいく結果を得ている。阿方：ピアノも電子オルガンも、鍵盤楽器はソロ楽器とみなされやすいが、戸引先生がご紹介くださった電子オルガンによるピアノコンチェルトからは、充実したアンサンブルのあり方がうかがえる。次に、北川先生からも言及のあった、電子オルガンのアイデンティティを追求するオリジナル作品に関する音舞会の取り組みについて、西山先生からお話いただく。

西山：電子オルガンのために現代の作曲家が作品を書いて発表するコンサート「COMPOSITIONS」は1990年に始まり、本年11月25日に15回目が予定されている。初演再演含めて述べ86曲が発表された。このような取り組みを継続的に行っている団体は他にないのではないかと。日本で最も多くの新作を発表している団体であると自負している。オーケストラやバンドの代用と認識されることが多かった電子オルガンのアイデンティティを確立し、楽器としての認知度を上げるためには、この楽器のために書かれた音楽作品があることが大切である、という発想で、当時阿方先生がいらしたエレクトーンシティ渋谷とのタイアップで音舞会が始めたコンサートである。

電子オルガンの認知度はずいぶん上がってきたが、まだアイデンティティは曖昧であると感じる。多機能で多音色であることがアイデンティティの確立を難しくし、代用品、趣味で一人オーケストラができる、などなど玩具的な印象も払拭されておらず、芸術的な表現のための楽器としての認知度は低い。ヤマハのエレクトーンは誕生して57年。東京タワーと同じ年である。歴史が浅いのである程度は仕方がないことかもしれないが、この楽器のアイデンティティを意識して書かれたオリジナル曲を蓄積していくことで現状を打破することが、このコンサートの意義であると考えている。

これまでのコンサートの模様をDVDで少しご紹介したい。

DVD：福地奈津子作品 自作自演
安彦善博作品 演奏：山木亜美
菊地雅春作品 演奏：安藤江利

電子オルガン作品では、作曲家が楽譜を書いたら演奏者がストレートに演奏するのではなく、まずはレジストレーション、音作りをするという作業がある。レジストレーションの作業と作曲家の関わり方は、大きく5つタイプに分かれる。

1) 作曲家が演奏家のレジストレーション作業に立ち会って、演奏家と一緒に音を作るタイプ。作曲家の意向が直接反映される。

2) 例えば「星空のような」などの大まかなイメージをスコアに書き込んだ後は演奏家に任せるタイプ。演奏家のイメージによって様々な音色が生まれる。3) 全く作曲家は指示せず、演奏家にすっかり任せるタイプ。演奏家は第二の創造者である、というスタンスである。例えば先ほどDVDで作品をご紹介した安彦氏はこのタイプである。大まかなイメージを指示される作品よりも、さらに演奏家の自由度が高くなる。

4) 作曲家がオーケストラスコアに書いてエレクトーン奏者に渡すケース。本年のコンサートでは、私が初演させていただき高橋通氏の作品がその一例である。一旦オーケストラスコアに忠実な音作りをし、そのあと、演奏家のイメージで音色を別の楽器の音や電子音に差し替えてたりしている。作曲家が電子オルガンに馴染みがない場合は、電子オルガンの3段鍵盤に書かれたものが演奏家にとっては弾きにくい場合もあれば、機能などの使い勝手に沿わないこともある。そうした場合は、作曲家が書き慣れた形でイメージを表現し、それを演奏家が汲み取りながら電子オルガンとしての表現、その奏者なりの表現に昇華していくのも一つの良い方法ではないかと思われる。この方法のメリットは、この過程から、一つの作品のオーケストラ版と電子オルガン版が同時に生まれることである。また、演奏家にとっては、音の塗り絵、音の着せ替え的な面白味を感じながらの作業となる。

5) 自作自演。思い通りのレジストで思い通りの演奏をする。電子オルガンの世界にはこのようなケースも稀ではない。

これら5つのパターンのそれぞれに、電子オルガンの機種変更による必然的な音色の改定もあり、同じストリングスという名前の音色でも機種とともに変わるので、作品は必ず時代とともに変化していくのが電子オルガンの特徴でもある。

作曲家が作曲をし、演奏家は演奏をする、という単純明快な線引きができないのが電子オルガンの面白さであり、そこにアイデンティティがあるのではないかと感じている。

さらに機種変更により音色も必然的に変化。同じストリングスでも変わるから作品は時代と主に変化。電子オルガンの特徴。今後は作曲家に電子オルガンのことをよりよく知ってもらい、作品を増やし、一般聴衆が繰り返し作品を開ける機会も増やしていくことが、電子オルガンの認知度を上げることにもつながると考えて、

「COMPOSITIONS」のコンサートを続けていく予定である。

阿方：以上、様々な側面から電子オルガンの音楽を追求する試みを語っていただいた。充実した取り組みを長年継続している稀有な団体として、今後のご発展をお祈りしている。

1. 開会の辞：阿方俊事務局長
2. 議長選出：出田敬三代表幹事
3. 報告
 - 1) 2015年度下半期～2016年度上半期活動報告
／阿方事務局長
 - ・第11回全国大会開催
2015年11月15日（東京学芸大学）
 - ・幹事会5回
第11回全国大会でラウンドテーブルを開催したタテ線譜メソッドの研究部会の設立を承認
 - ・タテ線譜メソッド研究部会ワークショップ開催
2016年6月5日（昭和音大）
電子オルガン部会のワークショップもできれば来年開催したい。小規模で形式ばらないスタイルで意欲的に開催し、欧米の先例があるわけでもなく、日本国内の前例も無い電子キーボードの分野の実践を蓄積していきたい。
 - ・JSEKM「お知らせ」メール
第11回全国大会以降11回配信。
事務局からのお知らせ、熊本の地震を受けての平成音大関連の情報、第12回大会関連等。
会員情報、コンサート情報などフェイスブックでは告知できたがメール配信は出せなかったものもあった。
従来は紙のニュースレターを会員に送付していたが、電子と名のつく学会でもあり、世の流れにも鑑みて紙ベースでなくメール配信で、ということ切り替えた。しかしそれだけで良いかどうか再検討が必要であろう。
様々なご要望もあろうが、実際に作業のご協力いただける方が必要で、将来的にはできれば週刊くらいのペースでお知らせメールも配信できれば良いのではないか。関係の団体、学校、個人でなさるコンサートその他の企画のPRにも、お使いいただきたい。
 - 2) 2016年度上半期会計報告・同監査報告
阿方事務局長：昨年急逝された生頼氏の後を受けて、幹事会から北條哲男氏に事務局補佐をお願いし、幹事会にもご出席いただいている。学会若返りの一環として、実質的にはバトンタッチして仕事を進めているので、会計報告も北條氏からしていただく。
北條事務局補佐：幹事会からの要請をお受けし、本年6月頃からお手伝いさせていただいている。
2016年度上半期の会計報告をさせていただく。
学会誌に関して、経費削減のため今号から印刷業者をインターネット上に窓口があるところに変更した。
本学会は、まだ次年度の予算が立っていない秋に総会が行われるため、総会の時点では今後の具体的な見通しを得にくい。今後の見直しが必要であろう。
古田監査委員：生頼氏急逝の後ご家族に通帳など探していただき、本日本学会の預金通帳、書類を改めて監査、適正的確に処理されていることをご報告する。
 - 3) 2016年度選挙結果報告他／阿方事務局長
11月7日に開票し、6名は得票数の多い順に選出。4名は3つの部会関係の幹事数のバランスを考慮して代表幹事の裁量に任せる。
代表幹事の選び方について、本学会規約では連続する2期（4年）を超えない、となっているが、運営の継続性等を考え、歴代代表幹事にも相談した上で、出田現代代表幹事に3期目をお願いしたいということになった。
幹事会の若返りのため、副代表幹事には金銅英二氏。
事務局長には北條哲夫氏。阿方現事務局長は引き継ぎも兼ねて1期程度幹事として残る。
前回学芸大学での全国大会開催でお世話になった石川裕司幹事は今回ご辞退。
タテ譜関連の幹事が阿方だけであったので、和智正忠氏にお入りいただいた。
4. 協議
 - 1) 第13回全国大会候補地について
10月1日 文教大学に確定
 - 2) その他